# 紀尾井 江戸 邦楽の風景（十四）

# 地獄

## ―苦悩と騒乱―

**11月18日(金)**
**午後6時30分開演**

**演奏とともに絵や詞章など視覚的に邦楽を体感するシリーズ14回目は、「地獄」が舞台です。**

竹内道敬

堅田新十郎

稀音家祐介

杵屋直吉

国貞画「三世相錦繍文章 堕地獄の段」国立音楽大学附属図書館蔵

地獄、ときいてどのような世界が思い浮かぶでしょうか。三途の川や閻魔様など知っている言葉もあると思います。近年話題になったどんなイタズラッ子でもこの絵本を見せれば一瞬でおとなしくなるという絵本「地獄」も記憶に新しいところです。江戸時代に芝居や落語でお馴染みの「藪入り（住み込みの奉公人等が実家へ帰る事ができる休日）」は、地獄の釜の蓋が開く閻魔様の縁日（正月とお盆）と結びついて、閻魔堂参りをするなど、地獄というのはもっと身近な存在でした。邦楽にも地獄を題材にした作品が多いのですが、地獄を巡ったり（地獄廻り）、地獄を経てから極楽に上がったり（地獄破り）する内容が多く、極楽よりも地獄に詳しいようです。今回はその中から常磐津節と長唄の2曲をお届けします。

### 常磐津――三世相錦繍文章（さんぜそうにしきぶんしょう）

全六段で、すべて演奏すると6時間を超える大作です。三世とは過去・現在・未来、または前世・現世・来世とも言います。そして父・子・孫の三代を指しますし、「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世」という封建時代の思想もあります。「堕地獄の段」は、妹のお園を妾に売り飛ばそうとした金貸しの長庵と同輩の権兵衛が、地獄でもしたたかにやり過ごそうとします。閻魔様の前で罪を照らし合わせると所業が明らかになり、二人はそれぞれふさわしい地獄へ、お園とその夫の六三郎は浄土へと案内される曲です。地獄とはいえ地獄が不景気で倹約していたり、多くの罪人で賑やかだったりとおかしみのある内容です。

### 長唄――鷺娘

変化舞踊として有名な本曲は、宝暦12（1762）年4月、江戸市村座で初演されました。一羽の白鷺の姿を恋に翻弄される女ととらえて描いたものといわれる他にもさまざまな解釈があります。前半は雪の降る中、傘を持って佇む娘の可憐で艶やかな風情ですが、後半の地獄の責めは曲の美しさと裏腹に、凄惨な地獄の様が続きます。三味線の見せ場でもあり、難しい合方（あいかた）（唄を伴わない三味線だけで演奏される部分）で壮絶な場面を演出しています。